



古代西アジアに都市文明の源流を探る

研究者所属・職名：人文社会系・教授

ふりがな やまだ しげお

氏名：山田 重郎

主な採択課題：

- [新学術領域研究\(研究領域提案型\)「西アジア都市文明論」\(2018-2022\)](#)
- [基盤研究\(A\)「文献学・考古学の協働による紀元前18～8世紀の上メソポタミアの歴史研究」\(2016-2020\)](#)

分野：西アジア考古学、歴史学

キーワード：西アジア、都市研究、楔形文字学、考古学、歴史学

課題

● なぜこの研究をおこなったのか？（研究の背景・目的）

古代西アジアでは人類史上初めて都市型社会が生まれ、都市を中心に地域の在り方が決定づけられる社会構造が広域に形成された。西アジアの都市は、豊富な考古学史料と保存性の高い媒体（粘土板）に書かれた多くの文字史料によって、都市文明の発生とその古代における変容に関して、大量のデータを提供する。私たちは、人類の都市との関わりの原点であり、都市をめぐる濃密な歴史的経験である古代西アジア都市の研究を通じて「都市文明」を再考したい。

● 研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）

西アジア都市の発生のプロセス、景観と社会的機能の変遷と多様性、環境との相互影響関係を解明するためには、多数の異なる研究分野の協働が必須である。そこで考古学、文献学、自然科学、歴史学、都市研究など諸分野の研究者を集め、「都市とは何か」という命題を西アジアの隣接地域ならびの後代の西アジア都市の諸相も射程に収めて考察することで、古代西アジア都市の個性を浮き彫りにし、その後代への影響を明らかにするよう努めている。

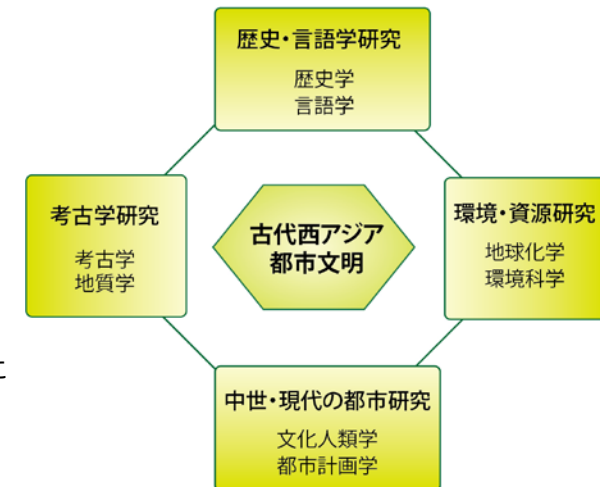


図1 研究連携



古代西アジアに都市文明の源流を探る

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

先史時代における「都市文明への胎動」とも言うべき社会の複雑化を考察すべく、トルコ共和国バトマン県の新石器時代遺跡ハサンケイフ・ホユックで先史時代集落の発掘調査をおこない、新石器時代の定住集落を確認。また遺跡から出土する動植物遺物依存体の分析から、同遺跡は狩猟採集民による大規模な定住集落だったことが判明している。また、イラク・クルド自治区スレマニ県においてもジャルモ、トゥルカカなど複数の先史時代遺跡の踏査、地形・地質調査、地形図作成ならびに発掘調査を実施しており、いわゆる「肥沃な三日月」地帯における社会の複雑化についての調査・考察を進めている。

また、同じくイラク・クルド自治区スレマニ県のヤシン・テペ遺跡においては、発掘により新アッシリア時代（前10～7世紀）の大型建物、多数の青銅製品が副葬された未盗掘の墓、文字の刻まれた装飾品などが発見され、しばしば「世界最古の帝国」とされる新アッシリア帝国が、その東の辺境においてどのような都市を形成し、広域領土支配の実現を目指したかが明らかになりつつある。

文献研究においても、ラガシュ文書、テル・タバ文書、エマル文書、中・新アッシリア文書など種々の楔形文字文書（行政記録、契約文書、王碑文、書簡、天文日誌など）の分析を通して、各地の西アジア都市の景観と都市社会の解明に向けて研究が進展している。



図2 遺跡発掘調査と楔形文字粘土板

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

上述の古代西アジア都市の諸研究に加えて、古代エジプト、中世～現代にかけての西アジア都市についての歴史研究、現代西アジア都市の重層性に関する都市計画学的・人類学的研究等が並行して進められており、これらの研究成果を合わせて、「西アジア都市」ならびに「都市文明」の本質を探るべく、文明論的考察を進めていきたい。（URL：<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/>）



図3 現代の西アジア都市